

阿部綏、子遺歌集

阿部綏子遺歌集

昭和五十一年八月五日 印刷
昭和五十一年八月十五日 発行

えんじゅ叢書
第三集

阿部綏子遺歌集

著 者 阿 部 綏 子

印刷所

(協)福島印刷センター
福島市北矢野目字渋田二八―九

発行所

学校法人福島文化学園
福島市宮町三一―一九
電話福島二二―九二一八

発刊を祝して

福島県教育長 三本杉 国 雄

阿部先生と私の出会いは何時頃だったか、あまりにも永いおつきあいを願っていて遂失念してしまつた。ともあれ秘書室長になつたのが昭和二十八年春その頃からとしても二十年以上はたしかといえる。

その間、毎年新春五日の教職員全体との祝宴にも何回となくお招きいただき学校経営に寄せられた限らない情熱の息吹に圧倒されつつ、杯を重ねたものである。

市の教育長時代には幼稚園の経営に卓抜した手腕を発揮され、かつ新校舎の増築にも執念を傾けられたようにうかがえる。

私が福島高校長の時には、先生のこよなく愛されていた生徒さんをそっくり通信制課程の生徒として受け入れ、その間いろいろと協力しあつたこともなつかしく思い出されてならない。

阿部先生が、短歌に親しまれていることは県教育長になってからであり、

折々の新聞紙上を通して存じ上げていたが、その新鮮な感受力には感嘆というよりむしろ驚嘆の念に駆られていたものである。

このたび遺稿のなから珠玉というべき歌の数々をまとめられ歌集として発刊されるにいたったがこれを拝見するにつれても、今は亡き先生のひかえめがちな姿と微笑のただよう温顔を偲ばずにはおられない心境である。

どの歌も、先生が長年にわたって、多忙なそして複雑な学園経営のなかで、生徒との触れ合いや、日常の生活についてのほのぼのとした愛情や、そしてまた自然へのいたわりというか、一つ一つきびしい洞察のなから詠まれたもので、先生の、自己を静かに厳しく見つめつつ生まれた感動や喜びや慟哭を豊かにまとめつくした格調高い文学と申し上げたい。

私自身俳句も短歌も一つとしてものしていないし、いやむしろそうした心の余裕を持ち得ないことが当然だとしている今日の自分自身の生活を今更ふりかえりながら、先生のこのお仕事に対する情念と努力をお手本としなければならぬと、自分に言い聴かせつつ、筆をとどめる次第である。

序

序文を書く柄でないが、校長先生夫妻のご要請も在り、書かざるを得ない事情が在って筆把った。その事情は、おしまいまで読んで頂けば解って貰えると思う。

この歌集の著者阿部綏子先生は、生前叙勲で勲五等瑞宝章を受けられた。多くの人々は、破格の叙勲に驚かれたが、その教育界における功績に照らし、当然だったと思う。

この功績に瞠目する世人は、しかし阿部綏子先生が不世出の歌人で在られたことを知らない。尠くとも一部少数の人しか知らない。「能在る鷹」で通されたからである。

先生に、歌のことで接するようになったのは、拙宅に持ち込まれて大きくな

つて了ったえんじゅ会に入つて来られてからである。

入会以来、亡くなられる一ヶ月前まで、定例歌会に、ただの一度も、ご病氣中でも休まれた月の無いことは、この歌集の年別作品が証明している。

この不撓の精神が、織手と形容される女手一つでこの学園を創りこの繁栄を齎されたのだが、短歌文学の道にも、遺憾なくそれを示されたのである。

えんじゅ会では毎月二首づつを定例歌会に出すことにしている。この二首を毎月十余首は作っておられるそのストックのものを出しても間に合うのに、どんなに多忙でも、おからだがお悪いときでも、その月に作つたものから出されるのだ。お疲れがお顔にまざまざと現れているときでも、東奔西走のご繁多の月でも、必ずその月作つた作品を持って来られた。

このことは、自からを鞭つ先生が工夫の歌の道精進の方法であつたらしい。その結果はこの歌集に見る成果となつた。

序文に代表作品を抄するのが例のようであるが、そうすると、多忙な読者はその代表作しか読んで下さらぬ虞があるので、私はそれをやらない。全巻一首残さずお目を通して頂きたい為である。

先生は、お若い時から、歌人としての懨れをひそかに育んで居られたらしく、入会当初から、その非凡の才分と精励とで、才氣喚発という状態であつた。つまりぬ批評など寄せつけぬ毅然とした作品のみを出された。一度表に出せば東北六県短歌大会をはじめ、いつでも入賞し賞品を持って歸られた。

えんじゅ会の宿主みたいな私が賞めても手前賞めの観が在るので、賞め言葉は止めて、もう一度申し度い。全巻、一首残さず読んで頂き度いと――。如何に秀れた歌人であつたか私の言葉を待たずうべない下さるに相違ない。然るに生前一卷にまとめて世に問うことなしに逝かれたことは、われわれ同行者の、何とも残念でならぬところであつた。

ところが、逝去幾何も日を経ぬのに、現校長高橋先生の来訪あり、遺歌集出版の協力を要請されたのには、そのご孝心の厚きと、事業継承のご繁多の中、多大な費用を以ってこの事を遂げられるご熱意に、只々敬服せざるを得なかった。

この歌集上梓は、故人がひそかにお考えになられたことを、後継者が機敏に察しての企であり、故人の追善に、これ以上の供養はなく、草葉の蔭でどんなにおよろこびになっておられることか。同時に、実は本県の文化、本県の文学振興に、文化学園の教育事業にも劣らぬ重大貢献であると確信するものである。

昭和五十一年五月一日

阿部綏子遺歌集

装
画
装
幀

中

田

満

雄

もくじ

序文

序文

三本杉 國雄
一條和一

昭和三十八年

四十一首

一

昭和三十九年

十二首

一七

昭和四十年

三十三首

二三

昭和四十一年

六十七首

三七

昭和四十二年

五十一首

六三

昭和四十三年

三十二首

八三

昭和四十四年

四十四首

九九

昭和四十五年

三十二首

一一七

昭和四十六年	二十九首	一三一
昭和四十七年	三十一首	一四三
昭和四十八年	二十八首	一五七
昭和四十九年	三十八首	一六九
昭和五十年	十一首	一八五
写真三葉		
略歴		
あとがき		

昭和
三十八年

粉雪^{こなゆき}のやむときもなく降る真昼灯^{とも}して居れば
心やすけし

ならび立つ墓碑のひとつに銭苔のはびこりて
ゐて文字読み難し

竹藪の伐られてあらはに見ゆる家に夕べを早
く灯^ひのともりたり

風なぎし海のはたてに日の没^いりて茜はながく
波にのこれり

川の中の石一つ一つに積れる雪ゆるき流にそ
の影うつす

ゆるやかな下りとなりて川沿ひの道白じろと
遠くつづけり